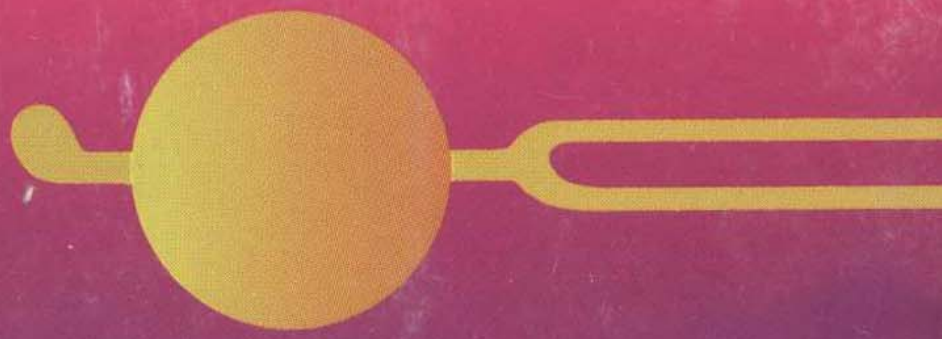
天保図録 ㊁

松本清張



講談社文庫

講談社文庫

定価360円

天保図録(二)
松本清張

昭和57年2月15日第1刷発行

発行者　三木 章
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112
電話　東京 (03)945-1111(大代表)
振替　東京 8-3930
デザイン　亀倉雄策
製　版　豊国印刷株式会社
印　刷　豊国オフセット株式会社
製　本　株式会社大進堂

© Seicho Matsumoto 1982

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えします。

講談社文庫

天保図録(二)

松本清張

講談社

目次

調伏（ちょうぶく） 七
長崎下り 五〇
壬寅（じんいん）の大奥 九六
操り糸 一三八
箱根の男 一五七
法令雨下 一九二
くらがえ女郎 二三三
苛察（かさつ） 二五八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

天保図録(二)

調伏

「だれだ、金八か？」
奥で渋い声がした。
日中は信者で混雑している教光院も、夜はひっそりとして暗い。傭人も寝ている。院主了善の居間だけに明りがさしていた。
「はい、ただ今、たち帰りました」
本庄茂平次は膝を折ってすすんだ。
彼は、ここでは金八という名前になっている。もと水野美濃守忠篤の若党であったが、主人が御役御免となり差し控えを命じられてからはお人べらしのために暇になった。同様にお屋敷から下がった女中のお袖といっしょになったが、主人美濃守が信心した了善の祈禱の絶妙さが忘れられ

ず、どうか自分を弟子にしてくれ、と頼みこんだのである。
弁舌はうまい。それに、お初穂料だとか、お神酒代とかいってそのつど多額の金を出す。金に欲の深い了善は、茂平次の金八の熱心な頼みに負けて、ついに弟子入りを承知した。
以来、茂平次は、ずっとここに住みこんでいる。如才のない彼は、経文や作法を習う一方、院内の拭き掃除にはことのほか精を出した。了善はよろこんでいるが、この丁寧な掃除には茂平次の魂胆があった。
茂平次の企みは、暇さえあれば信者から了善に宛ててきた手紙を調べることにあった。その中から、水野美濃守を罪に陥れる何かを探ろうとするのだ。
その効果はあった。美濃守の女がある旗本に嫁いで後室になっている。そのひとから了善へ宛てた招き状が発見された。これはいち早く鳥居耀蔵のもとに届けてある。
さらに一つ、茂平次がお初穂料として納めた相当な金額に対して了善から受取りを取っている。これものちに何かの証拠になるだろうと耀蔵のもとに届けておいた。
だが、もっと了善の罪状をつくる強い証拠を握らなければならない。
そのためには、美濃守が依頼している息災の祈禱だけでは弱い。なんとかして調伏の呪法をさせたいのだが、そのことを頼むとき、茂平次の金八は了善に言った。
「主人美濃守を追い落とした老中水野越前守が憎くてなりませぬ。彼らの調伏をお願いできませぬか？」
すると、了善は顔色を変えて叱り、
「とんでもない。美濃守さまはお気の毒であるが、その相手の方の寿命を縮めようなどという

怖ろしいことは自分にはできない。そんな祈禱は真っ平だ」

と、断わった。

「しかし、聞くところによると、先生はほうぼうから調伏の祈禱を頼まれているそうですが」

茂平次が押し返すと、

「金八よ、調伏はめったなことで引き受けるものではない。なるほど、わしは信者の人気を取るため三、四人から頼まれたこともないではないが、それは取るに足らぬ百姓輩だ。いやしくも身分のあるお方を呪うなどとは、逆法も逆法、空怖ろしいことである」

「それならば、あなたさまがなさらなくても、わたくしがやるぶんにはかまいませぬか？」

「そうだな、わしにはできぬが、ほかの者がやるのを止めることもできまい」

「それでは、ぜひ、わたくしにその調伏の方法をお教えくださいませ。……なんとしても主人の不遇が気の毒でなりませぬ。わたくしごときの法力ではとても効験はないとは思われますが、それでも主人を思う気休めにはなります」

こんな問答があって、ようやく茂平次は了善を説き伏せたのだった。

了善が言うのには、そのような行を教えるには高尾山まで行かなければならない。そこで護摩を焚いたり、滝に打たれたりしての行が必要であると説明した。

それが明日の出発に迫ったとき、茂平次はちょっと親戚に挨拶してくると言って、宵の口から教光院を出ていったのだ。もとより、行く先は耀蔵の屋敷であった。

いま、金八か、と了善に嗄れ声をかけられて、茂平次が奥の居間をのぞくと、了善は行灯を寄せてしきりと経文か何かを読んでいる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

了善は、近ごろとみに肥えてきて恰幅がいい。この大井村に流れついたときは、みすぼらしく痩せた男だったが、信者が二千人を超えるほどの繁盛ぶりとなった今は、贅沢なものの食べ放題で、見違えるように精力的な身体つきになっている。

「金八、えらく帰りが遅かったな」

了善は、小太りな背をまるくかがめている茂平次に言った。

「はい。親戚でいろいろと先生のお噂をしているうち、つい、遅くなりました」

「わしの噂だと？」

「はい。わたくしが訪ねた先は青山でございますが、おそろしいもので、先生の霊験はあちらのほうまで聞こえております。それで、いろいろと先方から尋ねられるまま、つい、話しこんでいるうちに、このように遅くなりました。いや、もう、向こうでは、ただただわたくしの話に眼を瞠っているばかりでございました」

「あまり言い立てぬほうがいいな」

と、了善は口では言ったが、まんざらでもない表情だった。

「なかには不心得な者がおりまして、これは放蕩者ですが、ひとつ好きな女を射止める呪法とやらがあれば、さっそく弟子入りしたい、と申しておりました。先生にそんなことを冗談にでも申し上げると叱られるから、いずれわたくしが奥義を得たうえ、女人折伏の新しい修法を編み出して進ぜようと言って帰って参りましたが、いや、先方は、先生のあまりに摩訶不思議な力におどろいて、本気でそのように思い込んでいるのでございます」

「あはははは、おもしろいことを言う奴だ。……金八、明日は出発が早い。途中で疲れぬように早

く寝るがいい。なにしろ、高尾山に登るだけでも骨が折れる。くたびれては身のはいった修行にはなるまいぞ」
「はあ」

了善と茂平次とが内藤新宿の大木戸を出たのが朝の五ツ刻（午前八時）だった。
二人は、それから甲州街道を一筋に西へとった。高井戸まで二里二町、高井戸から布田まで一里二十三町、府中へ一里二十町。それから日野、八王子と足を伸ばしたときは、かなり陽も傾いていた。
「先生、ようやく八王子の宿場にはいりましたな」
途中でも何くれとなく茂平次は了善の身の周りの世話をしていた。
「うむ。なにしろ日中の暑さには参ったな」
「これからお山に登れば、ずっと涼しくなりましょう。あと、もう一息でございます」
八王子の宿を過ぎると、これまでの坦々とした平野が尽き、すぐに急な山路になる。街道をまっすぐに行けば小仏峠に出るが、高尾山は、途中の駒木野から南のほうへ路をとる。ここから小仏まで二十六町。
「金八、いま何刻だ？」
「さようでございますね、かれこれ六ツ半（午後七時）になりましょう。陽が沈んで小半刻経ちます」
「お山に登ったころは、ちょうど、戌の刻になるな」

了善は、呪法の時間を計るように言った。
「先生、御堂に着きましたら、すぐおはじめになりますか？」
「いやいや、今夜はよそう」
「は？」
「わしもここまで一気に歩いてきたせいか疲れた。今夜はゆっくり疲れをやすめて、明日の朝からかかることにしようぞ」
「さようでございますか。……なにしろ、炎天を十二里も歩いてきたのでは無理もございませぬ。わたくしも参りました。いや、先生が先におっしゃったので正直に申し上げます」
「だが、おまえもなかなか我慢強いな」
「修法を習いたいため一生懸命でございます。普通なら、わたくしも今ごろは府中あたりの宿場で按摩をとらせているところでございます」
両人は提灯を頼りに細い山路を登りはじめた。両側は鬱蒼とした杉林で、昼でも暗いくらいだから、夜は闇の壁が両方から押し包むように迫っている。梟が啼いていた。
「先生、そこに何やら書いてあります」
茂平次は、梢に隠れそうになっている石に提灯を近づけた。
「武蔵国多摩郡高尾山有喜寺薬王院は、ところのかみ聖武天皇の大御時に行基菩薩初めて造れり。千年とし経てのち後円融天皇永和二年に沙門俊源大徳神のお告げによりて再びおこせし法の場あり。……」
茂平次は読み下して、

「いよいよ、これから先でございますな。おや、この横にも道標があります。右の方富士山へ通う道。左の方小仏峠まで五十町。……なるほどね」
と、提灯を離した。
「先生、この高尾山は、どのくらいの広さでございましょう？」
また、登りながら、茂平次は如才なく訊く。
「されば」
と、了善は言った。
「今もおまえが読んだとおり、ここは天平十六年行基菩薩の開闢されたところで、薬師の古道場じゃ。であるから、人界を絶した霊峰を選んで建てられている。当山の界域は、東西五十町ばかり、南北三十五町、絶頂より東のほうは三十余町にして峰と境を接し、その先はまた山になっている。西は十二、三町で馬上ケ坂、逆沢を限りとして御林の山につづく。南は半道を経て峰界に至っている。北は二十五町ばかりで小仏側の岸に至る。東南の麓より山頂に登るまで曲折の山路はおよそ三十六町じゃ」
「たいそうなものでございますな」
「当山の森林は櫛比して、その材木の種類は檜を第一とし、松、杉、欅これに次ぐ。なかにも杉は土地によろしきにや、最も伸びて天に届くばかりじゃ。そのほか雑木がおい茂って、日中はそれが天日を遮ってとんと夜と同じだな」
「それなら、さぞかし獣の類も多うございましょうな？」
「山中には猪、鹿、猿をはじめとして、すべて走獣は他と異なることはないが、鳥は仏法僧が

いて、土地の者は霊鳥と申している。しかし、昼間には啼くことがないから、ひとはそのかたちを見た者がない。夜中、森林にその声を聞くだけじゃ」

「先生、あれがその声ではありませんか？」

耳を澄ますと、梟とも違う啼き声が短く三段に切れて聞こえてくる。

「金八」

「はあ」

「おまえは運がいい奴だ。この鳥は始終は啼かぬが、この御山にはいったとたんに聞けたとは、よほどの仏果があるのかもしれぬな」

「ありがとうございます。……一生懸命に修行いたします」

路は爪先上がりの急坂になった。それがいくつも山の急勾配に沿って曲がりくねっている。

行くにつれて夜鳥の啼き声がけたたましく樹の間から聞こえてくる。草むらを騒がして何やら走る音がするが、むろん、物体は見えない。

あれは野兎がおどろいて逃げたのだと了善は説明した。

ようやく、黒い家のかたちが星空にわずかに見えてきた。

「あれが護摩堂だ」

と、了善は弟子に言い聞かせた。

「夜は戸を閉めて鍵を掛けているから、今夜はあの軒下で野宿だな」

「ちょうど、よろしゅうございます。涼しくてよく眠れることでしょう」

「ばかなことを申せ。この山の夜は冷えて冬のように寒い。風邪を引かぬように気をつけろ」

高尾山の境内にはさまざまな建物がある。蓮華院、浅間社、証寂庵、浄土院、不動院、薬王殿、白雲閣などだが、これらが向こうの峰、こちらの谷に散っている。護摩堂は山腹にあった。

夜が明けたときの眺望は何ともいいようがない。一面にかかった蒼白い霧が谷々を埋めて高い頂だけを黒く島のように浮かせている。墨絵のような濃淡のぼかしは朝日が射すにつれて光が山頂から匍い下がり、逆に霧が上に昇っていく。谷底の霧が消えるまでには長い時間がかかった。

霽れ上がると、四囲の山々が一望に見える。甲、相、武の三州はいうまでもなく、北に回ると、信、越、東に上、毛、西に駿、遠、南に上総、下総の諸州の連山が眼にはいる。遠く相模灘、遠州灘、上総灘がかすみ、富士山は真向かいだった。

東のほうこそ武蔵野がひろがっているが、そのほかは入りくんだ襞の多い山岳が幾重にも折り重なって波のように雲の下に続いている。

瘴気陰々。北条氏康が関東の鎮めとして、この山を霊場に選んだのも、もっともと思われた。

夕方の眺めがいい。

西の雲間から射す陽は山々の頂上だけを赤く染めるが、山陰や谷は蒼然たる暮色に塗られ、下には、霧が動き出す。はるか底のほうを一条の渓流が細く白く光る。

それも束の間で、夕陽が凋み、連山の稜線が日没後の空にたゆとう澄明な蒼さの中を黒一色に描いたかと思うと、急速に天地の闇が閉じてくる。あと、光るものといえば、おそろしく澄んだ月と星だけであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com